

シュービナ、オーリガ・アリクシエヴナ

イムチン新石器文化集落の住居群（北部サハリン）

ユジノサハリンスク、海洋地質学及び地球物理学研究所・サハリン州立郷土誌博物館 1987年

Шубина, Ольга Алексеевна. Жилища поселений имчинской неолитической культуры (Северный Сахалин).

Южно-Сахалинск: ИМиГ, СОКМ, 1987.

第2部（訳文前半）：扉、同見返し、序及びイムチンII遺跡（原本1~17ページ）

（扉）

ソ連邦科学アカデミー極東科学センター海洋地質学及び地球物理学研究所

サハリン州執行委員会文化局サハリン州立郷土誌博物館

O.A.シュービナ

イムチン新石器文化集落の住居群（北部サハリン）。

プレプリント。

ユジノサハリンスク 1987

（扉見返し）

国際十進法分類 930.26/571.64/.

シュービナ O.A. イムチン新石器文化集落の住居群（北部サハリン）。プレプリント。ユジノサハリンスク：海洋地質学及び地球物理学研究所、サハリン州立郷土誌博物館、1987。33ページ、挿図10件。

この著作は、サハリン州ノグリキ地区所在のイムチンII及びイムチンXII集落において長期間行われた発掘の過程で調査されたイムチン新石器文化の住居を記述したものである。竪穴の構造の特徴が示され、居住の所産たる遺物組成の考古学的な比較分析を基礎に放射性炭素年代測定による年代決定があり、1973年から1984年までの野外調査による資料が学界に紹介される。

責任編集者 カナニェンカ H.A.

著作権所有 サハリン州立郷土誌博物館。

（本文）

サハリン北部は考古学の分野において極東のうちでも興味深い地域である。ここでは現在までに旧石器¹⁾、中石器²⁾から後期新石器までに及ぶ幅広い年代の考古学的記念物が多数発見されている。数の上で最多の記念物群となるのは新石器時代の遺跡・集落であり、前4-1千年紀の範囲の年代が与えられる³⁾。中でも特別の位置を占めるのはトゥイミ川とその支流であるイムチン、ノグリキ、ウグレイクトゥイ川の流域の遺跡群で、共通した立地、石器・土器群の組成の特徴、住居の構造などを、サハリン北部の地方新石器文化群の一つ「イムチン新石

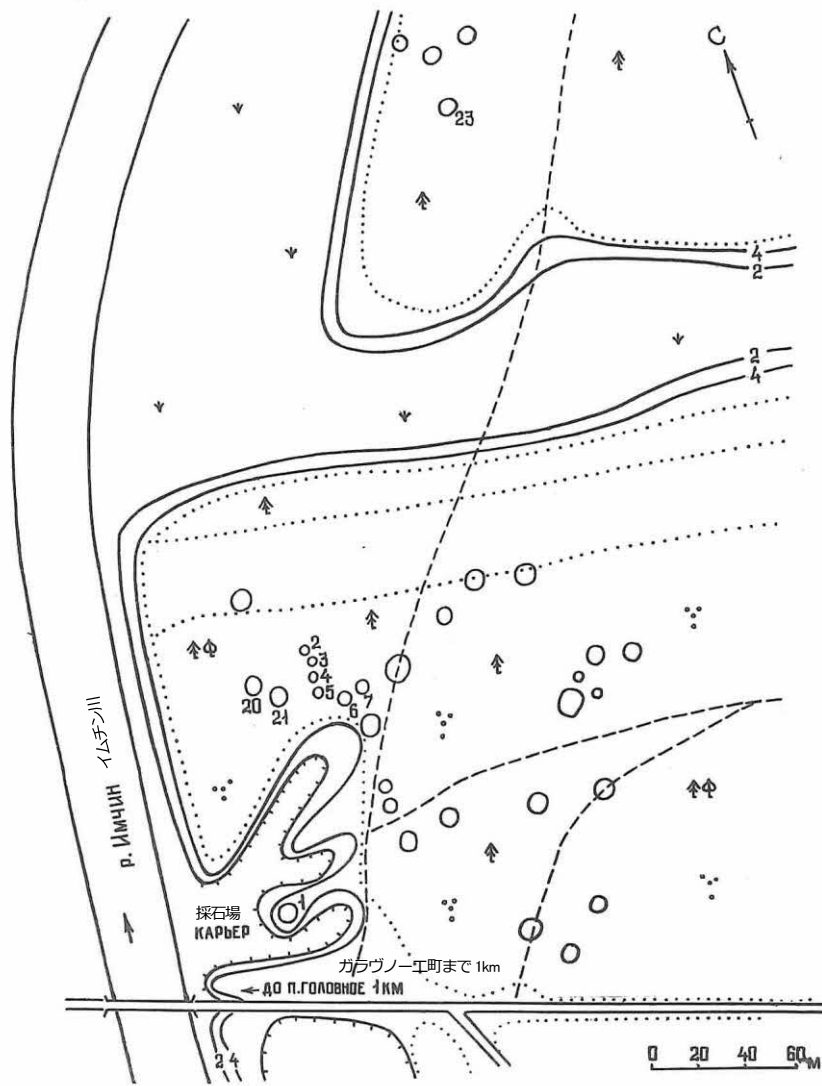


図1 イムチンII新石器集落の全体図

器文化」としてまとめることができる。この文化の記念物のうち長期間の発掘調査が行われたのはイムチンIIとイムチンXIIの2箇所、これにより多くの放射性炭素年代値、二つの集落の住居構造と考古遺物の組成についての貴重な情報が得られ、他方またイムチン文化はそれ自体継続的な階梯を経て発展したものと結論されることになったのである。

この著作はイムチン新石器文化の集落で調査された住居の記載を行ったものであり、その課題は1973~84年のイムチンII及びイムチンXIIの発掘調査の過程で得られた新しいデータを学術的に利用する道筋をつけることである。発掘はソ連邦科学アカデミーシベリア支部歴史・言語・哲学研究所、ソ連邦地理学協会サハリン支部及びサハリン州立郷土誌博物館の考古学調査旅行として筆者の参加のもとで行われた。

イムチン川流域では現在までに14箇所の集落が知られており、それぞれ3基から26基の住居が数えられる。記念物の立地は一様であって、全てがイムチン川兩岸の比高3~6mの離水した、グイマツの森林とハイマツの茂みに覆われた段丘に位置し、海岸からは10~15km離れている。今日の地表からも平面円形で直径3から15m、0.3~0.6mの落ち込みをもつ堅穴が観察される。

イムチンII集落(図1)は、イムチン新石器文化調査の中核となった遺跡の一つで、明瞭な規則性なく配置し

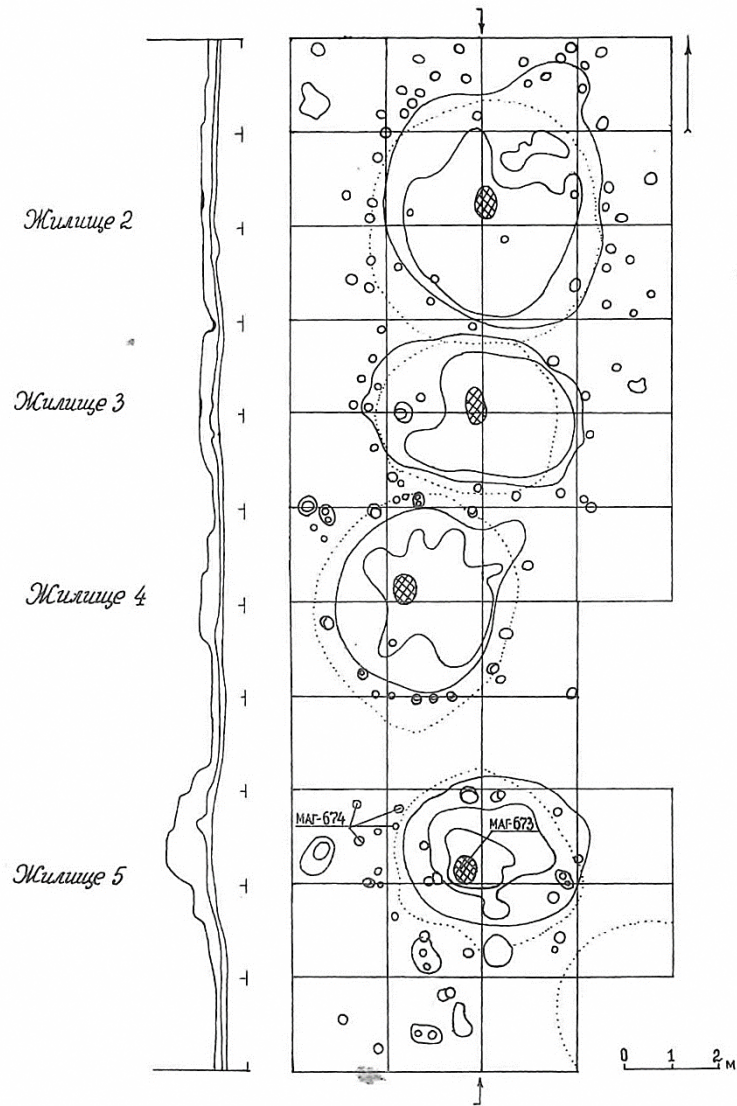


図2 イムチンⅡ集落2・3・4・5号住居の平面図と地層断面図

た住居跡 26 基が数えられる。これらは平面円形の、直径 3 から 10~12m の落ち込みで、深さは平均して 0.3~0.6m、横断面で見ると壁面が盃状に滑らかに落ち込んでいる。文化層の厚さは竪穴の覆土で 0.6~1m、住居の間の空間では 0.2~0.5m に達する。文化層は黄褐色の砂質土で、腐植土の下位にある明灰色の砂質土、砂、細礫、炭粒のブロックやラミナが含まれ、多量の遺物を含んでいる。

層位、遺物の組成及び多くの放射性炭素年代の分析から、この記念物には様々な年代の文化複合が含まれていることを立証できる。イムチンⅡ集落への居住の年代上限は型式学的には前 4~5 千年紀と判断され、最も古い放射性炭素年代は $5,890 \pm 90$ 年、つまり前 4 千年紀の初めであり 23 号住居から得られたものである⁴⁾。

イムチンⅡ集落の居住の年代下限は前 1 千年紀の中頃であり、20 号住居から得られた $2,570 \pm 100$ 年、つまり前 590 \pm 110 年という最も新しい放射性炭素年代からそのように判断される⁵⁾。イムチンⅡの文化層の明確な分層はできておらず、より新しい居住の所産がより古い文化層に入り込んでいるため考古学的な資料は入り混じっているが、砂質土の特性のため様々の年代に属する文化複合を層位的に区分することは困難である。

イムチンⅡ集落で調査された各時代の居住の所産が一つの文化の年代的な発展の諸段階を示すものであること

は疑いが無い。それらが一連のものであることを表しているのは住居の構造、石器群の組成と土器の特徴であり、一方諸段階の差異は土器製作の技法の中に読み取ることができ、また放射性炭素年代によっても確認することができる。

住居群をあらかじめ二つの群に区分することができよう。その第一は2・3・4・5・6・7・及び23号住居跡を含むグループで、比較的小型の（直径3~6m）、掘り込みの浅い（0.2~0.6m）堅穴がまとまっており、床の中央部の踏み固められた区画に炉があり、これに伴う石器組成の典型的なセットを特徴づけるのは両面調整石器の技術の優勢と、求心状剥離手法を示す、もしくは礫素材の不定形な石核から剥離した不定形、稀には石刃状の剥片を素材とすること、そして典型的な石刃や整った形態の石核の欠如である。土器の特徴としては焼成が弱く、多孔質で脆い器壁、生地に多量の有機物が混和され、鉱物質の風化物の混和が見られないこと、水平に複数条の凹線が施された口縁には装飾はないか、またはところどころ点線様の櫛歯状の押捺で縦にジグザクの装飾を施すこと、そして細かい櫛歯状の押捺が挙げられる⁶⁾。

第一のグループの住居の多くは放射性炭素により前3千年紀中頃から前2千年紀中頃の年代が与えられている。さらに古い年代を示した試料が2件だけある。23号住居の覆土から採取されたものと、6号住居の周囲の小さい穴から得た試料で、前4千年紀後半である。遺物の組成が一樣であることから、このグループの住居群は比較的「純粋な」あるいは「限定された」文化的複合の例であり、イムチン新石器文化発展の早い段階を反映しているものとみなしてよい。

1・20・21号住居跡は第二のグループとしてまとめられ、出土品の年代が明らかに多様で、複数の文化複合が混じっている点で第一のグループから区別され、そのことは層位にも、技術的な特徴を示す要素にもまた土器の装飾にも表れている。これはまた放射性炭素年代測定によっても確かめられる。20号住居の堅穴覆土と住居周囲の小穴から採取した試料による4件の測定値のうち、2件が前2千年紀中頃のものであり、他の2件は前1千年紀中頃のものである。

このグループの住居群の土器資料の中には、第一のグループの堅穴で発見されたのと全く同一の資料と共に、土器製作の伝統に向上発展が生じたことを示す土器片がある。つまり、生地に鉱物質の風化物が混和され、製品の焼きも改善され、器壁はより堅牢になっており、土器表面に施す上掛け粘土の採用が普及し、イムチン新石器文化に特徴的な口縁の水平な凹線を保存しつつも装飾モチーフはより多様になっている⁷⁾。石器群の形態的・技術的な伝統は以前のままであるが、磨製石器が数量的に増加していることが注意される。

両グループの住居の構造は原則の部分では同じであって、平面の輪郭は全て円形であり、床の中央部の区画は石のように硬く踏み固められ、支柱は円形に配列している。第二のグループの住居は寸法がより大きく（直径7~11m）炉がないことで区別される。またこれらは輪郭が不明瞭だが、それは住居がより古い文化層を掘り込んでいるか、先行する住居跡を一部破壊していることによるものらしく、恐らくこのことが出土品の組成が一樣でないことの原因ともなっている。このことを最もはっきり追跡できるのは20号住居の例で、この例では「本体の」大きな堅穴に炉を持つ小さな堅穴が2つ「付け加わって」おり、この2つはその形式の点で2~5号住居に非常に近い。

以下はイムチンII集落における1973~78年の発掘の過程で調査された10基の住居の簡単な記載となる。発掘の総面積は728m²であった。

イムチンII、2~5号住居（図2）

2・3・4及び5号住居跡は互いに直接隣りあって、堅穴の壁がほとんど接した状態で並んでおり、南北方向に連なっている。現在の地表に見える窪みは浅く（0.3m以下）平面は円形で、断面は皿状である。完掘の結果、堅穴は円形あるいは不整な楕円形の平明形を持つが、2・4号住居の北東部に比較的短い（長さ1m以下の）通路状の突出があることが明らかになった。堅穴の壁面は急であり、高さは0.15~0.37mで60~70度の角度で落ち込んでいる。縁辺部には段〔ベンチ状の高まり〕が認められ、その幅は相当の範囲で変動を見せる。どの住居にも中央

部に比較的平坦な、不整形な輪郭の水平な区画があり、そこに焼けて赤褐色になった砂質土と細かい炭片を含む砂質の焼土が溜まった炉が位置する。竪穴住居跡、段及び炉の計測値を表に示す。

2~5号住居計測値の表 (単位 m)

住居番号	住居の規模	壁面の高さ	段の高さ	段の幅	炉の規模	焼土レンズの厚さ
2号住居	5.05×4.5	0.15	0.2	0.15~1.0	0.55×0.45	0.05
3号住居	4.4×3	0.25	0.18	0~1.75	0.95×0.28	0.03
4号住居	4.4×3.4	0.26	0.05	0~1.2	0.5×0.45	0.03
5号住居	3.9×3.15	0.37	0.45	0.45~0.9	0.4×0.4	0.02

主柱の穴は円形または楕円形で、径は0.1~0.3m、深さは平均0.25mで、住居の縁辺部に沿って竪穴の肩に接した内側からも、また竪穴の外側からも検出されている。全体として円形の住居骨組みの構成を確認するのに十分である。またこの構成から外れた柱穴も建物建築の周囲に認められる。

住居から出土した考古資料はかなり一様である。石器の組成に含まれるのは不定形、より稀には石刃状で一部に使用の痕のある剥片、両面調整石器（非対称な木葉形、あるいは三角形に近いナイフの破片と完形品、楕円形に突出した刃部のある削器と搔器、小さな石鏃の破片2点のうち一つには斜行する細部調整がある）である。方形に近い輪郭の縦斧と横斧の破片があり、断面はレンズ状か台形状で、全面が研磨されているものと剥離による成形の残っているものがある。石核は形状不定の礫であるが、例外として2号住居跡の覆土から発見された明灰色のフリント製の円錐形の細石刃核（3×1cm）があり、平坦打面と幅の狭い平行な細石刃剥離痕をもつが、同じ層に細石刃自体は発見されなかった。

土器の資料は数少なく、3号住居では器壁の細片があっただけでほとんどないに等しい。一連の技法的な指標からみて土器はイムチン新石器文化の製陶伝統のうちでも早い段階のものとなる。

5号住居については竪穴床面の炉から採取した木炭試料により放射性炭素年代が得られた。

MAΓ-673 3,700±250年、すなわち前1,720±250年

5号住居の西側の肩に近い竪穴周囲〔つまり竪穴外〕の複数の穴から採取した木炭試料はより古い年代を示した。

MAΓ-674 4,570±300年、すなわち前2,590±300年

イムチンII、6号住居 (図3)

6号住居跡は現在の地表では平面楕円形、断面は皿状の7.5×6.5m（東西方向に長い）を測る深さ0.6mの窪みであった。完掘の結果、住居は円形の輪郭を持ち、竪穴寸法は6.5×5.5m、深さは0.55~0.6mで床面積は約28m²であった。竪穴の肩はかなり急角度で、約60度で落ち込んでおり、住居の床は平坦である。その中央部に大きさ3×1.2mの長手の輪郭を持つ0.2~0.25mの高さに盛り上がった区画が認められ、強く圧縮された礫混じりの砂質土と鮮やかな赤色に焼けた砂質土が堆積し、一部はさらに明灰色の砂質焼土が覆っていた。この区画は北東から南西方向に伸びている。その上に径1.2m、厚さ1~3cmの円形の焼土のレンズがあり、灰が載っていた。柱穴は概して円形または不整形な楕円形をして、径0.15から0.5m、深さは平均0.2~0.3mで、竪穴の縁辺部に沿って内側では竪穴の肩のすぐ下に（5基）、また外側では竪穴壁面から約0.2~0.5m離れ、また相互に1~1.5mの間隔を置いて位置しており、さらに住居周囲にも見られた。住居北東側の壁に近いこうした柱穴の一つで、現在の地表からの深さ0.35mのところから木炭試料が採取され、次の年代を示した。

MAΓ-680 5,650±250年、すなわち前3,670±250年

これはイムチンII遺跡で得られたうち最古の放射性炭素年代の一つである。しかし我々としてこの年代を確信を持って6号住居の複合にあてることができないのは、竪穴南側の壁に近い同様な柱穴の同じ深さから木炭試料

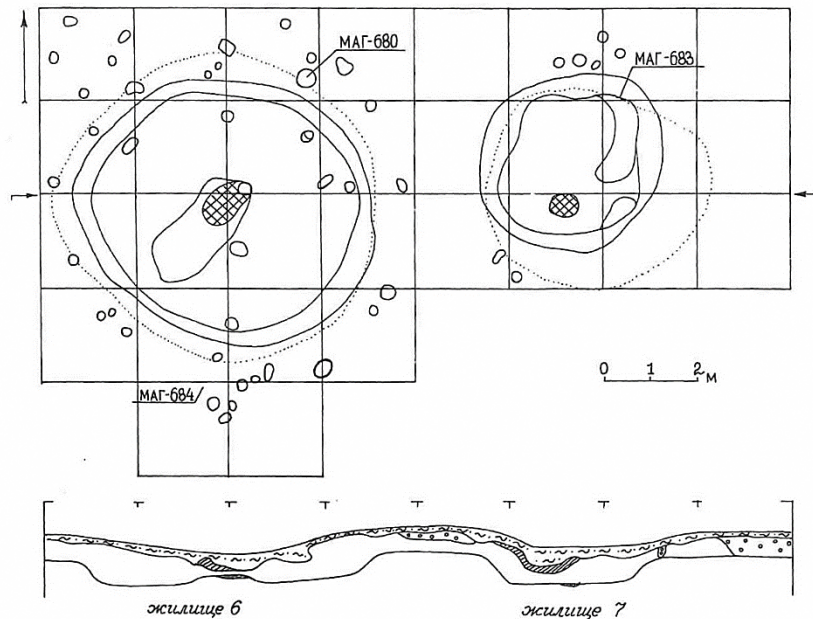


図3 イムチンII集落6・7号住居の平面図と地層断面図

により次のような年代を得たことによる。

МАГ-684 4,500±100年、すなわち前2,520±250年

6号住居の土器資料はイムチン文化製陶伝統の発展の早い段階の特徴を示している。石器の組成も典型的であり、求心状剥離手法を示す礫素材の石核と、そこから得られる、つまり主に不定形の、稀には石刃状の剥片、両面調整石器（非対称的な木葉状のナイフ、植刃、石鏃）、削器と搔器、細部調整のない、しかし使用痕分析によって石器と判明した剥片素材の遺物群多数⁸⁾、剥離と研磨で加工した縦斧と横斧という内容である。興味深く思われるのは、石器の大半（377点）が炉に近い平面円形の、径0.2m、深さ0.15~0.2mの小さな穴に集中して、現在の地表面からの深さ0.6mのところで見出されたという事実である。この集積を仮に「工匠の財物」と呼んでいるが、これは「純粹な」遺物の複合であることが自明で、それ自身がイムチン新石器文化の石器組成の特徴についての標準となるものである。

イムチンII、7号住居（図3）

7号住居跡は現在の地表面では平面楕円形、大きさ4.5×4m、横断面は皿状で深さ0.4mの窪みである。完掘の結果、竪穴は楕円形で、東西方向に長く、寸法は4.25×3.7m、深さ0.6mであった。竪穴は肩から40~50度の角度で落ち込み、住居の床は平坦で、床面積は約12.5m²である。床の南部に竪穴の壁から1m離れて円形で径0.6~0.65mの炉と思しい変色部があり、赤褐色に焼けた砂質土が堆積して炭片や灰が混じる。文化層はその色も硬さも地山とあまり変わらないため、竪穴内の柱穴は検出されなかった。竪穴住居跡の範囲には、竪穴の北側の縁のそばに5箇所、南の縁のそばに2箇所の小さな穴が発見され、その大きさは径が平均0.2~0.25m、深さは0.05から0.2mであった。住居の東側の肩に沿った床の小部分に礫や粗粒砂の多い圧密を受けた砂質土が堆積していた。この場所で、現在の地表から0.46~0.5mの深さのところから炭化物の小さな集中や散在する炭を試料として集め、次のような住居の年代が示された。

МАГ-683 4,500±100年、すなわち前2,520±250年

7号住居跡の覆土から収集された石器・土器の資料は隣接する6号住居の出土品と同様である。二つの住居の

放射性炭素年代は同じ数値を示しており、従って6号と7号住居の年代は同じで、前3千年紀中頃のものとなしてよい。

イムチンII、23号住居（図4）

23号住居跡は、イムチンII集落の主要な住居群からは北東へ400m離れて所在し、平面は径約5.5mの円形、深さ0.4m以下の窪みであった。堅穴の肩の傾斜は弱く、実質ははっきりした段はなく、住居の床は概ね平坦、面積は約23m²であった。中央部は褐色の砂質土が0.1m以下の厚さにつき固められ、一方縁辺部は柔らかくて幾分腐植化した砂質土が堆積している。堅穴の西側部分に踏み固められた区画があって突出し、堅穴の肩に接続した形で、またそこから少し西向きに屈曲しているが、これは建物側面の出口を示すものかもしれない。住居内に炉と思しい焼土のレンズは見られない。堅穴北東部の床面上の覆土から木炭試料が採取され、その放射性炭素年代の結果イムチンII集落に関するものでは最古の年代が示された。

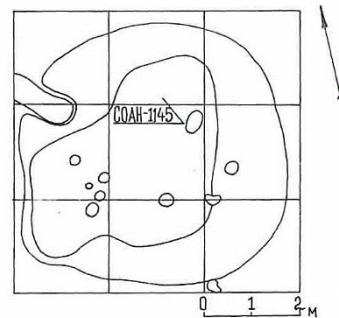


図4 イムチンII集落23号住居の平面図

COAH-1145 5,810±90年、すなわち前3,840±90年

石器の組成は貧弱だが、礫素材の石核からとった不定形の剥片を素材にした両面調整の石器製作技術と刃部だけを研磨した打製の横斧の存在⁹⁾を特徴とし、土器資料は一連の技法的な指標によってイムチン新石器文化の製陶伝統の古い段階に属するものとみられる。

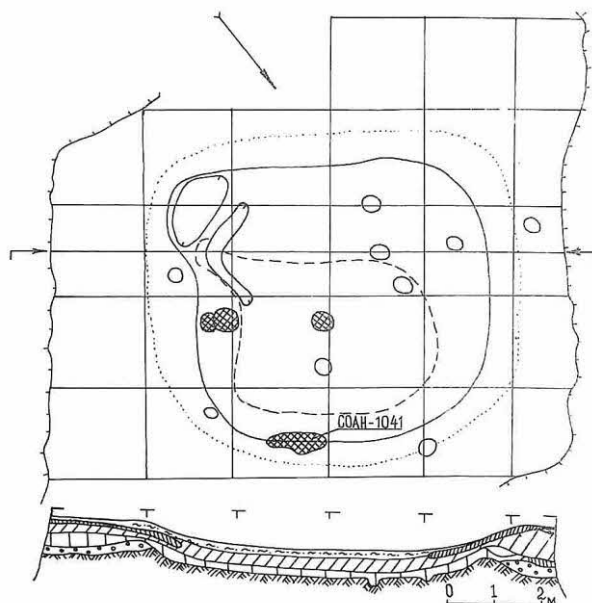


図5 イムチンII集落1号住居の平面図と地層断面図

イムチンII、1号住居（図5）

1号住居跡は現地表では平面円形、直径約8m、深さ0.5m以下の落ち込みである。完掘の結果、堅穴は円形もしくは四隅の丸みの強い四辺形の形状をもち、その径は約6m、床面積は約29m²であることが明らかになった。堅穴の肩の傾斜は緩やかで、高さ0.3~0.4m、床は中央に向かって弱く窪み、堅固な、強く踏み固められた薄い砂質土の層である。この層の及ぶ床面の区域の平面は隅丸方形で、その南方向に突出した部分が伸び出ているのが観察されるが、これは建物側面の入口の存在を示す可能性がある。床面レベルに3箇所、炉と思しき変色部があり、1箇所は住居の中央、他の2箇所は北東部分にある。これらの変色部には炭片を含んだこげ茶色の砂質土が形成されている。変色部のうち二つは平面円形で径約0.5m。

もう一つは堅穴北東側の肩に近く位置し、長楕円形で大きさ1.4×0.5m、レンズの厚さ0.1mである。その下位の砂は焦げていないので、これは炉ではなく単なる焼土と炭の廃棄であるかもしれない。その近くに主に石器で組成する考古資料の集積が発見された。床面には円形で径0.2~0.4m、深さ0.3m以下の穴の跡が9箇所検出された。

地層の状況と石器・土器の組成の分析、及び放射性炭素年代測定の結果から、この文化複合は単一時期のものではないと考えてよい。住居の地層断面にはかなり明瞭に複数文化層の成層が現れており、地山に掘り込まれた、

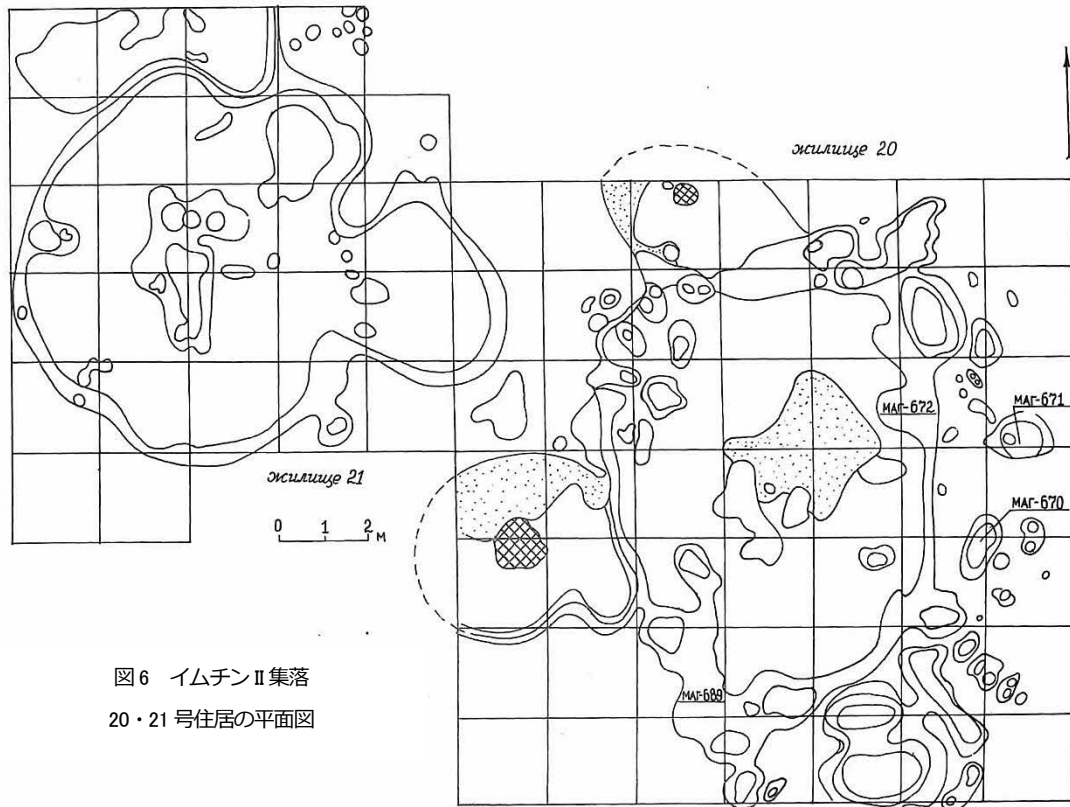


図6 イムチンⅡ集落
20・21号住居の平面図

より古い住居跡が、遅れて形成された文化層によって後になって覆われたことを裏付けている。竪穴の床の炉由来の木炭試料は次の年代を示した。

COAH-1041 4,060±50年、すなわち前2,090±50年

恐らく、この年代は住居の構築と使用の時期を反映しており、その一方で竪穴覆土のより上位層準で採取したもう一つの木炭試料はより後代の集落での活動にかかわるもので、その年代は900~1,000年新しい。

COAH-1146 3,120±50年、すなわち前1,150±50年

残念ながら、発掘に際して出土した考古資料は層別の記録がなされていないが、収集された土器資料を見ると製陶伝統の早期の特徴も、より後期のものも観察され、また石器の組成は¹⁰イムチン新石器文化に典型的な両面調整の、あるいは不定形または石刃状剥片を素材とした石器のセットと並んで真正の細石刃を含み、これは2~7及び23号住居の複合には欠落しているが、20・21号住居の資料の中にはみられるものである。

イムチンⅡ、20号住居（図6）

20号住居跡は今日の地表では平面円形、直径7.5m、深さ0.5m以下の落ち込みとして痕跡を残している。完掘の結果、大きさ11.4×7.2mの竪穴が検出され、形状は楕円形で南北方向に伸び、その床の面積は約52m²であった。竪穴の肩に沿った段差は全体が明瞭というわけではなく、壁面に入り込んだり、内外両面から壁面に接続したりする穴のためにあちらこちらが破壊されている。竪穴の深さは0.25~0.5mである。床のうち直接竪穴の肩に連なる部分は明黄色の柔らかい砂質土が形成され、一方住居の中央は断面で見るとレンズ状の、不整な輪郭をもつ薄い層が広がっており、これは非常に堅く踏み固められた腐植と礫混じりの砂質土である。支柱穴は径0.3から1m、深さは平均0.4~0.6mであり、竪穴の縁辺部の内側に沿って記録されているほか、不整な輪郭の穴が3箇所床の中央部に検出された。柱や居住の用途に供された穴の痕跡が竪穴の周囲〔つまり竪穴外〕でいくつも発見

された。住居内に炉の焼土のレンズは見られない。

小さい堅穴が二つ、北側と西側から 20 号住居に接続している。これは不整楕円形の窪みで、大きさは 3×4 及び 4×5m、深さは約 0.3~0.5m である。両者とも床の一部に踏み固められた礫混じりの砂質土が形成されており、炉が大きさ 0.5×0.5 及び 0.75×1m のレンズ状の焼土層としてはっきり認められる。恐らくこれらもやはり堅穴住居跡であり、形式の点で隣接する 2~5 号住居に近似するものであろう。これらは 20 号住居に伴うものではなく、異なる年代のものである。

地層と考古資料の検討からは、20 号住居跡はより古い複数の建造物の文化層を一部破壊しているものと考えることができた。石器の組成は礫素材で求心的な剥片剥離法を示す石核と不定形の石核を含むが、例外となるのが北側から 20 号住居に接続する小さな堅穴の床面で発見された明灰色のフリント製の、平坦打面と幅の狭い平行な細石刃剥離痕をもつ円錐形の細石刃核 (3×1.5cm) と細石刃である。大多数の石器は両面調整のもの、または不定形、ときには石刃状の剥片を素材に加工したものである。打製・磨製の縦斧・横斧もある。これらが年代幅のある複合であることを示す重要な指標は土器である。20 号住居からの収集資料の中に、製作技法と装飾のうえでそれぞれ固有の特徴を持つ、製陶伝統中の発達段階が二つあることがはっきりと読み取れる¹¹⁾。

この文化複合が時間幅のあるものであることを立証するものは放射性炭素年代である。このうち 20 号住居跡の外まわりの複数の穴から得られた 2 件の年代は、恐らく住居への居住年代の上限を反映している。

МАГ-671 3,400±80 年、すなわち前 1,420±80 年

МАГ-689 3,500±100 年、すなわち前 1,520±100 年

他の 2 件は新しい段階の文化の属性となる。

МАГ-670 2,640±100 年、すなわち前 660±100 年

МАГ-672 2,570±110 年、すなわち前 590±110 年

このうち最後の年代を得た木炭試料は、20 号住居の覆土中の土器の集積の中から採取しており、その土器は形式的にイムチン文化製陶伝統発達の後期段階のものである。

イムチン II、21 号住居 (図 6)

21 号住居跡は今日の地表に平面円形、直径約 7m で断面皿状の深さ約 0.4m の落ち込みとして痕跡を残している。完掘にともない、住居跡は円い平面形をもち、規模は 8×7m、壁面は 0.5~0.6m の深さに 70~80 度の急角度で落ち込むものであることが判明した。床面積は約 50m² である。東側から堅穴住居跡に円形の径約 2.4m、深さ 0.5m に達する窪みが接続している。比較的平坦な床の中央部に、南北に延びる不整な輪郭の区画があって、石のように踏み固められた細礫と砂質土が断面レンズ状に、0.5m に達する厚さで堆積していた。これは草の根の層のすぐ下から始まって浅い穴の中に溜まった状態であるが、地山に達する 0.12~0.2m 手前で止まる。文化層と地山の土質の特性のため、支柱穴はごく弱い痕跡が認められたに過ぎなかった。堅穴内部とその外回りにはかなり規模の大きい穴がいくつか認められ、恐らく居住の用途に供されたものであろう。炉と思われる焼土のレンズは見られなかった。炭片の集積は住居覆土のあちこちに見られた。

放射性炭素年代はこの居住の所産については得られていないが、出土品の検討によるとそれらは単一時期の物でないと言ってよく、特に土器資料にはそのことが明らかに示されている。